

忘れられた

遺跡遺物の発掘 (三)

一、キリシタン信仰遺物

キリストの顔面石 朝見三丁目神氏宅



昭和二六年頃、八幡朝見神社の西方にある台地上の耕地から発見された。当時この顔面像は耕地の石垣の一部として、顔面を内側にして積み込まれていた。材質は朝見地方に多い硬質安山岩に刻まれた等身大の頭部で、後頭部は自然石のままで、顔面の額にはクルスが陰刻されている。改宗をせまられていた朝見のキリシタンが密かに礼拝していたものであろうか。

別府のキリシタン墓（「別府史談」七・八号）は、内成、枝郷、朝見など南・南西部の山間部に分布の密度が高い。おそらく大分郡の狭間・庄内方面から伝わったものと考えられている。

ここに、浜脇崇福寺の僧玄香が代官に差し出した天罰起請文がある（熊本大学）。

「天罰起請文前書之事

今度伴天連門徒御改ニ付

浅見村 兵吉

浜脇村 新十郎

今迄きりしたんにて御座候つれ共 今月九日より我等宗旨にまかり成り候 此の者の儀向後我等請人に立申

若し相違の儀御座候と脇口より立 御耳に候はば拙者を御成敗ならるべく候 以上

(略)

慶長拾九年三月九日

村田三右衛門殿

田仲角兵衛 殿

「浅見の兵吉と浜脇村の新十郎は今まで伴天連門徒でしたが、今月、崇福寺の宗旨(禪宗)に改宗いたしました。この者達は今後は我々が保証人になります。もし改宗が間違であることを他から申し立てられお耳に達す

キリシタン地蔵 南野口墓地

かつて南石垣屋田氏屋敷内の廃庵・徳林禅庵内にあった首部を欠く地蔵である。蓮華座正面に一影重女、その両側に元文五申歳二月廿一日(一七四〇)と刻んだ蓮弁台座に安置されている。隠し十字は、地蔵の底面部にあり、台座と接するところに幅広く彫られている。

別府のキリシタン墓の石塔は独特の形をしており、何



いだ。南北朝の騒乱では北朝の足利尊氏に属し、九州で肥後の菊池武光や懷良親王の南朝軍と激しく戦った。この間、氏は高崎山に山城を築き、南朝軍を何度も迎え撃った。

氏は朝見郷御塔原(乙原)に、吉祥寺を創建し昌華祐和尚を招いて開祖とした。寺址にある宝篋印塔は氏が「三世供養」のために建立したものとわれ、正面には「大友氏時之塔」右面に「文和四乙年」、左に「二月廿一日」の銘がみえる。文和四年(一二三五)は氏時の盛時である。

氏は応安元年(一三六八)三月廿一日に没した。遺志により寺内に葬り、諡を「大応寺殿天祐慈鑑(又ハ玉



気なく釘で引っ搔いたような隠しクルスがある。

二、大友氏石塔

八代大友氏時の塔 乙原吉祥寺

『豊後国志』「在 朝見郷朝見村吉祥寺廢址」

大友氏は貞和四年(一三六四)兄氏泰より家督を継

安大禪定門」と号したと記している。(昭八別府市誌)

笠は隅飾が大きく重厚味があるが、全体に端正で室町期の特色がうかがえる。

氏時の墓は、庄内町大応寺の無縫塔であるといわれている。

十一代大友持直の五輪塔

『豊後国志』「在 石垣荘(正しくは竈門荘) 平田村」

大友刑部少 持直永享中創焉」

大友持直は応永三十年(一四二三)伯父親著から家督を相続した。家督を継いだ持直は、大内氏との抗争に加



えて家督争いに絡んだ一族の確執に明け暮れた。

平田観音寺は、養老四年（七二〇）仁聞が本尊を刻み寺を創建して相宗寺と号した以後無住となつて荒廃したが、永享八年（一四三六）豊後守護職であつた大友持直が寺院を再興して円通山観音寺と改称した。

大友持直の五輪塔は本堂裏の古塔群のなかにある。高さは一米ぐいので決して大きなものではないが、室町期の特色を持つ塔である。

持直は親重に家督を譲るが、その後、戦乱の中で没した。文安三年（一四四五）・永禄三年（一四六一）ともいわれるが墳墓の地も不明である。観音寺の五輪塔が持直の墓であつても不思議ではない。

三、石書大乘妙典塔 南石垣墓地

鶴見山の扇状地を流れ下る境川は普段は枯れ川で、当時は「境河原」とか単に「河原」と呼んでいた。しかし一旦豪雨に見舞われると大洪水を起こして流域の人家を押し流す荒川になった。

享保十四年（一七二四）九月十三日の洪水は、台風が



水はね様

天保九年（一八三八）七月二十一日、上流の右岸の御普請所を押し切った土石流は、新しい流路をつくって別府村内（今の天満地区）を流れ下り、天満社の前を迂回して本流に合流して海へ流れた。

御普請所の堤防が決壊すると川は左右両岸自在に流路をつくって人家を押し流した。境川の流域には流れの抵抗を強く受けるところに、堤防を築いて氾濫をふせぎ「水はね様」を祀って護岸を祈願した。

四、園内坊の十王の石鉢 坊主地獄内

『鶴見七湯廻記』（弘化二年）の、「木の本神の事、十王石鉢并園内坊地獄之事」に、火男火売神社境内の椎の大樹林の中にある神威猛烈の荒神、「木の本神」は、九



もたらしたものであろう。供養塔「石書大乘妙典塔」の銘文によれば、川は左岸（北岸）が切れて下流の別府村と南石垣村の村境の家々二十戸余りが潰れ、双方の村人男女の溺死者が二十一人も出たと書かれている。この妙典塔は小浦村の尾林氏が府内の万寿寺の僧に碑文を書いてもらい建立した。

首藤氏の『家宝珍事記』にも「九月十三日九ツ時より夜九ツ時まで別府村境天神（と）南（南石垣）芹原の間を流れた 其の節堺天神・節丸堂は悉く流れ残り この度も幸神仏・境河原の観音に少しも（水）かららず 誠に仏神の陰によるべきこと也」と書かれている。

月二十八日の丑の刻に大宮司が只一人でお祭りをするが、その時に一緒に祭りをする十王の石鉢について次のようにかかっている。

「…園内坊に半ば木の葉に埋れて十王之石鉢あり…誠



に上古のものと見へ侍り
いかなるゆへよし有り
ける石鉢也 今は更にし
れるものもなし」と書か
れている。まさにその十
王の石鉢である。弘化二
年にはすでにそこに鎮座
していたのであるが、そ
の後久しく忘れられてい
た十王の石鉢である。

由緒は全く不明である
が発見した喜びは大きい。

（入江）